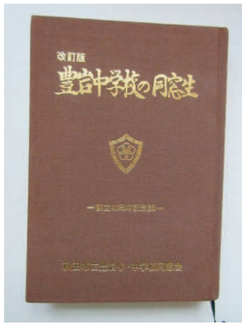
私の秋田弁ライフ（8）リバイバル

昨年の総会出欠ハガキのコメントに、昭和29年工業化学科卒業の大島錬三さんから、地主さんの「私の秋田弁ライフ」を愛読しておりました。とても面白かったです。乞うリバイバル記事！！ と有りました。東京秋工会の寄合所「音羽亭」での編集会議でも、面白いからもう少し書いてみたらとの意見があり、調子者の私は一度大島さんに会って見ようと住所を調べたところ、なんと隣の八王子市で家から車で20分の所にお住まいでした。土崎の出身で東芝の研究所から子会社の社長をされ現在も関連業界で活躍されながら、町内会長やボランティア活動で地域に貢献されているなど、今年80歳とは見えない矍鑠とした素敵な大先輩でした。

左：大島氏・右：地主

リバイバルとは「生き返ること」のようですが、今までは高校卒業してからの思い出を書きましたので、今回は昭和63年10月に発行された秋田市立豊岩小・中学校同窓会発行の「創立40周年記念誌」に同級生代表で掲載された一文から思い出を生き返らせてみようと思います。

昭和37年4月に上京以来25年、田舎での生活より都会生活が長いはずなのに、馴染みの酒場のママは「地主さんはいくつになっても変わらないですね」といわれる。裏を返せば何時まで経っても垢ぬけないと言うことであるが私はむしろこれを誇りに思っている。なぜなら18年間過ごした故郷豊岩の思い出と何時までも一緒に居られるからである。冬は真っ白な太平山と氷の張った雄物川、田んぼには堆肥の黒い小山が点々とし、朝日で周りの景色がキラキラ輝く中を赤いホッペで白い息を吐きながら登校したこと、堤防でスキーをして川の氷が薄くて落ちたこと、小正月にはナマハゲが来て早く自分も青年団と共にナマハゲをやりたいと思ったこと。春は田植えで農繁休暇があり、植え手のアバ達に苗を投げ渡すコナイマワリの手伝いをしたあとの笹巻や焼きおにぎりとガッコのうめがったこと、初夏には蛍を蚊帳に放して寝たこと。秋は鍋っこ遠足、各部落毎にリヤカーに味噌、米、野菜やカレーの材料と鍋を積んで堤に行き、皆でわいわい言いながら作った半煮えのジャガイモの入ったカレーライスの味、そして晩秋には落ち穂拾い、学校の前に広がる田んぼに全校生徒が袋を持って落ち穂を拾いそれを農協に売って図書室の本を買ったこと等々数え上げれば切りがない、そして私はこれからもこの思い出を大切に何時までも変わらない故郷と自分でいたいと思う。



28年前に書いた文章であるが故郷を思う気持ちは変わらず、懐かしく思いだされるのです。

春は田植えで忙しく学校も農繁休暇で10日くらい休みでした、アバやオドは苗代かぎから苗床、堰からの水引きと忙しく、田植えのときはアネチャの子供はイズメコに首だけ出して道端に置かれ、その面倒やらコナイマワリで苗を投げるやらと子供達も大忙しでした。田植えが終わると「さなぎら」と言って田植えを手伝ってくれた人達を招待して宴会を開いたものです。手作りの料理には、ワラビ・ゼンマイ・コゴミ・タラの芽・イタドリ・ホンナ、シドケ・アイコ・ヒロッコ・アザミ・ミズ・タケノコ・ニヨサク等の煮物、天婦羅・叩き、おひたし、酢の物や自慢の漬物で、飲めや歌えの大騒ぎでした。私の親父は民謡から演歌、踊りも上手く、場を盛り上げる名人でした、その血を引いたのか私も地元の老人会のスターとして、オバアチャン達のアイドルとなって宴会部長を務めています。

「さなぎら」が過ぎると今度は田圃の草取りです、高校の時は朝の4時に起きて、長い柄の先にスクリュウ状の歯車の付いた除草機で1反部を縦横、駆け足で掛け、家に帰って白米の弁当とクジラの缶詰2個と缶切りを持って教室へ、10時頃には腹がへって休み時間に半分食べ、残りは昼と今思うと楽しい思い出です。

夏は雄物川での水遊びです、同級生5人のいたずら坊主は川へ行く前に途中の畑でトマト、キュウリ、西瓜を盗みそれを投げて取り合う遊びに使い最後はそれを食べてさようならの、それはそれは楽しい夏休みでしたが、家に帰ると親父が「オメタジ！まだエンタロウの家の畑から盗んだべ！さきたオドがきてごしゃいでいたもの、そさねまれ！！」とゲンコツが3回、その痛でごど、休みが終わるまで7回くらい痛い思いをしました。エンタロウの家も今は息子の代でお盆に帰ると、昔のホジナシ悪ガキの事を親父から聞いたと言われ懐かしさで酒がよけい旨くなるのでした。

夜は川の浅瀬でカーバイトを使ったカンテラで照らし、ヤスで小魚を突いて捕るのが楽しみでした。カヤ吊って蛍を放し、満月が田圃に映り、カエルの大合唱と汽車の汽笛の中で眠る・・・今思うとなんと贅沢な暮しをしてたものかと、歳のせいか涙するこのごろです。

秋は実りの秋です。昔はカマで手刈りでした、刈った稲は丸太で組んだハサに干して、あたり一面が連なるハサの海で今でもその風景は目に浮かびます。そろそろ作業小屋に取り込もうとした時に天気があやしくなると、中学校の二階で勉強している私に先生が「地主！オド来たど、早ぐ行け」の声、馬車を引いた親父が下で待っています、ハサから稲束を外し馬車に積み込み、作業小屋に入れ終わると同時に雨！！「えがったな・・・」親父満足顔、俺あ・・こえがった！服をほろいで綺麗サッパリ、再び学校へ。

取り込んだ稲は、翌朝4時、足踏み式の脱穀機でモミとワラに別けます、モミとわらくずはトウミと言う風車に似た道具で振り分け、更に竹で出来たミ(箕)でモミとゴミやモミガラを分けやっと朝飯となるのです。モミスリ機で玄米にしてワラで作った米俵に入れ農協に持って行くのです。

学校の帰りは、悪ガキ5人は山道を探検し、アケビ、山ブドウを鞄に詰め、山芋の蔓を見つけたら目印を付け、家に帰って芋掘りシャベルをかつぎ、勉強では見せない集中力を持って掘り上げた時の達成感！家人に喜ばれました。

秋祭りは親戚が集まり宴会です、祭りの前日、親父は庭を歩き回っている鶏を捕まえて首を切り逆さに吊るして血を抜き、「羽根むしっておけ！」毎年この日が一番ウダデくてヤメなる時でした、ダドモ料理してケばうめもの・・・・・

紅葉の頃、神明神社の境内に「どん」と呼ばれる鉄釜の前に鉄網の付いた器械をおじさんが持ってきて、子供が米と30円を持って行くと、器械にサッカリンと米を入れ鉄釜をグルグル回しハンドルを引くと「どーん！！」と大音響と共に米が膨らんで出てきます、これを新聞紙に包みポリポリ食べては境内を駆け回ったものでした。

東京では10cmも雪が降ると大騒ぎですが、田舎では一晩に１m降る時も有りました。一面の銀世界、学校へはスキーを履いて田圃の上を一直線、山裾沿いの一里の道が半里になるのです。雄物川の小段がジャンプ台に、氷った浅瀬はスキー場に早変わり、勢い余って川の中へジャブン！スキーは長靴のままで後ろにバネ仕掛けの金具が付いたものや、竹を半割にして、あぶって前を曲げたもので滑ったものでした。滑りを良くする為に、ローソクに松ヤニを溶かして自分専用の滑り材を工夫し自慢しあったものでした。

田圃に水を張り、スケートリンクも作りました、親方衆の子供は長くつに取り付けるスケートを履き、我々皆の衆は下駄の下に金物を打ち付けた、ゲタスケートで遊びました。

春、夏、秋、冬、四季の自然の中で暮らした少年時代、それは何にも代え難い素晴らしい人生の宝ものでした、秋田に生まれ、秋田で育ち、今では「東京秋工会」「在京秋田市政情報交換会(けやき会)」「秋高連」「秋田県人会」と故郷を同じくする多くの方々と接するたびに、秋田弁懐かしく、故郷忘れず、故郷恋しく、思い出を大切に、明日からも、明るく、楽しく、元気よく、そして老後の生活で大切なこと「教養」・・今日何かする用が有る、「教育」・・今日どこか行く所が有るを忘れずボケないように頭を使い手指を使い、適当に体を動かし、適当に酒を飲み、適当にホラを吹いて、神様が迎えに来るまで頑張ります。

最後にこのリバイバルを提案して頂きました大島さんや編集の皆さまに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

◆記　事　地主 勝己（昭和37年土木科卒）
東京秋工会 副会長

The technical group which wrestles with the reproduction of natural environments
Limited Liability Patnership Land Owner Office
project management group office
2-23-8 Tsurumaki, Tama-City Tokyo 206-0034, Japan
japan TEL:+8142-371-3630
自然環境再生にとりくむ技術集団（プロジェクト マネジメント グループ）
有限責任事業組合 ランドオーナーオフィス
〒206-0034 東京都多摩市鶴牧2-23-8
TEL 042-371-3630 FAX 042-371-3687
理事長 地主 勝己
（昭和37年 土木科卒）